

河内守様

御番所

清次

疫神といひしやつ、ほどすぎでの風説に、大盗人にて、水中を潜ル事魚のごとく、家根など飛こ  
と鳥のごとく、同三年被召捕段々のよし云傳ふ、

〔鹽尻 四十五〕一疫瘟流行の時は、其家にて初めて疾に染し人の衣服を甌の上に置蒸遇すれば一  
家族まぬかる、

〔鹽尻 四十六〕近世るうだといふ草を、疫疾流行の時、身に帶疫氣を避とて、家に植侍る草はあるは

凡蠻語物の臭氣あるをるうだと云、此草香あしき故阿蘭陀人るうだといふ是に不限ごとくだみ  
氣あるを、皆るう、我國久しき呪にて門戸に葱葫の類を懸け侍るも同じ意にや、凡蒜を以て瘴氣

を祓ふ事、古事記卷の中景行出、日本武尊足柄山の山神を壓し給ひし故事より起りしと云々賢  
一名俗りうだ草といふ、一名著婆草といふ、

○按ズルニ、疫神ノ事ハ、神祇部神祇總載篇ニ在リ、參看スベシ、  
〔倭名類聚抄三〕瘧病 說文云、瘧音虐、俗云衣夜美、寒熱並作、二日一發之病也、

〔箋注倭名類聚抄二〕新撰字鏡、痲訓衣也三、又左牟也、彌按、和良波夜美、見源氏物語若紫卷、萬安方  
訓於古利也、美、又布留比也、美、今俗呼於古利、伊澤氏信恬曰、瘧訓衣夜美、一訓和良波夜美、疫亦訓

衣夜美、一訓度岐乃介、瘧疫其病雖有差別、並是天行時令之病、一國皆患之、故統訓爲役病、若拆言  
之、瘧訓童病、疫訓時氣、時氣者爲時氣所感、故以爲名、童病之名未詳、攷世說注、俗傳行瘧鬼小、多不

病、巨人、夢溪補筆談、載吳道子畫鐘馗有唐人題記、其略曰、明皇病、一夕夢二鬼、一大一小、大者捉其  
小者、啖之、夢覺疔瘰、太平御覽引錄異傳、嘉興令吳季瘧經、武昌廟辭謝、乞斷瘧鬼、夢一人縛取一小

瘧病